
Sweet dream home ~夢の中のあなた~

真咲静夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sweet dream home ～夢の中のあなた～

【Zコード】

Z4960T

【作者名】

真咲 静夜

【あらすじ】

sweetシリーズ第一弾　上藤真雪の同僚の普通のOL志村香苗と今一番人気の歌手雪夜とのラブストーリーです。

出会いは夢の中、夢の世界でのラブイチヤ生活に香苗は戸惑い、雪夜は絶対に探し出す決意をした。

別名義自サイトのブログで先行発表

夢の中の蜜月 side 香苗

香苗 side

「雪…お帰りなさい」

「香苗、ただいま」

愛しの旦那様をハグでお出迎え。

私以外の前では限りなく見ることがない満面の優しい笑み。

胸がキュンとなつて旦那様の胸に顔を埋める。するとマリン系の匂いがして更に胸が高鳴る。

男らしくスラッシュと長い指が顎の下を軽く押し上げて、うつとりするキスをされる。

「今日もかつこよかつた」

生放送の歌番組でしつとじとラブバラードを歌い上げていた旦那様は世界一かつこよかつた。

「香苗……君にそう言つてもらえるのが一番嬉しいよ」

玄関ホールで行き着くところまで行き着いてしまいそうな濃厚なキスをする。こんなに超絶美形な上に優しい男性が私の旦那様だなんて、なんて幸せ。

その後は抱き上げられてリビングに移動、旦那様が私の作った料理を頬張り後は終始イチャイチャしながら就寝。

今日も一日が終わった。幸せ。

……………

「うう……うるさい」

ベビードライヤーのサイドボードから財布を持ち上げると香苗は小銭を取出し、うるさい鳴り続ける田舎まし時計に小銭を入れる。

「またあの夢か……」

今まで特に気に入った芸能人は居なかつた香苗だが、三ヶ月前から毎日見る夢の男は流石に気になる。ファンではないのにもかかわらず毎日見るある芸能人との蜜月新婚の夢。

出す歌は全てチャートの一位を取る今日日本で一番人気の歌手雪夜（コキヤ）との甘い夢。

「確かに超絶美形だし毎晩夢で彼と蜜月つてイイんだけど、現実とリンクしている辺りが怖いよね」

ナイトウェアを脱ぎ捨て、シャワーに行く。昨夜は生放送の歌番組を見た後に夕食を食べたけど、昨夜の夢は食べた夕食のメニューが一緒だった。

「あり得ない」

キュッとシャワーを止めるとバスタオルで身体を拭い肌を整えて髪

を乾かしバスタオルを身体に巻いたままキッチンに行き食パンをトースターに突っ込みコーヒーをドリップする。朝食準備をしてからスーツに着替えた。

「ん？」

お気に入りのクラウンのネックレスを付けようと、クローゼット内の鏡を見て、さっき鏡の前に居た時には気が付かなかつたものを見つけた。

「キスマークだよね……なんで？」

彼氏居ない歴二年を更新中で、男とそんな関係になることはなかつたし……あえて記憶にあるつていつたら、夢の中の雪夜と？

「そんなまさかね……」

そんなことがあつたら、すんじゃ気持ち悪いって

ふと時計を見るとコーヒーのドリップが終わる時間だった。不可解ながらも香苗は朝食に向かった。

* * *

「おはよう。香苗ちゃん」

「おはよう。香苗ちゃん」

隣の席の美人なお姉様こと工藤真雪に香苗は挨拶をし鞄を足元に置くとウエットティッシュで机の上を軽く拭いた。ウエットティッシュを丸めて足元のクズ入れに捨てると真雪を飲みに誘う。

「久しぶりに今夜行きませんか？」

「うへん。景吾さんに聞いてみてからでいい？」

景吾さんは一人の上司である神崎景吾のことで真雪の恋人であった。社内恋愛禁止ではないが景吾の尋常ではないモテぶりに一人は口を閉ざしていた。景吾と真雪の関係を知るのは香苗だけだ。

「……真雪さん。つれないですよ」

「と頃つても、今日は景吾さんが夕飯の当番だもの」

「甲斐甲斐男も極まりですかねえ。私も彼氏が欲しいなあ……」

「え？ 香苗ちゃん、お付き合いしてる人いるんじゃないの？」

「居たらいじんな発言してませんよ」

「だつて、うなじにキスマー……」

「え？ 嘘？ 本当に？」

鞄から手鏡とファンデーションを取り出して合わせ鏡にして確認した。

「うわ……本当にある」

茫然自失の香苗を見て真雪は携帯を取り出しメールを送つてから香苗の肩に手をおく。

「今夜、飲みに行きましょうか?」

「……お願いします」

返事をすると香苗はトイレに行き、髪を下ろし席に戻る。業務時間を見せるチャイムが鳴り、香苗は仕事に入った。

「毎日夢でねえ」

「そうなんです。現実とシンクロしていく氣味が悪い……朝起きたらキスマークまであるとかあり得ないじゃないですか」

二人は生中片手に皿の前に並ぶ料理を摘みつつビールを楽しむ。

「確かに気持ち悪いね……誰かが深夜に忍び込んでいて、実際にどうかこうかある可能性はないの?」

「それだったら、それこそ色々と違和感が残つているはずじゃないですか。本当に夢の中だけなんです」

行為をされていたら少なからず違和感があるはず。それも確認できないからこそ不安になる。

「これで今日の夢が現実に通りに私が真雪さんと食事してたら、嫌なんんですけど……」

「カウンセリングとか占いとか、夢に関わるような所へ相談に行つてみたらどう?」

「とりあえず、今日の夢で考えます」そこで話を切り替えて、その後は真雪と神崎をネタにしばらく飲んだのだった。

「ただいま雪」

「おかえり。いつもと反対なのも新鮮だね」

今日は雪に先輩と飲んで帰ると伝えてあつたので先に帰ってきたらしい雪はゆっくり休んでいたらしい。リビングのソファーにはお気に入りのクッシュションと近くのローテーブルにはワインの一升瓶とグラスが置いてある。香苗の従姉からの贈り物で香苗のお気に入りの会社の赤ワインだ。

「ん……ラックをさせてもらつてるよ。香苗……」

雪の目がもう欲情に燃えている。なんて色っぽいの?

「キス……したいな」

ポツリと呟かれれば背筋をはい上がる欲望の熱。ふらふらと雪の唇に自分の唇を押しつける。誘つように開かれた口に舌を差し出せば、そこから先はめぐるめく熱い夢の世界。

「マジですか

いつも通り目覚まし時計に起しきされて夢の内容を再確認する。ついでに自分の体を見れば昨日に上乗せされたキスマードがそこかしこにあり、リビングに走れば一昨日届いた従姉からの贈り物の一升瓶赤ワイン。香苗が封を切っていないのに封がされたままなのに半分に減っていた。

「怖すぎると

香苗はその場に蹲つた。

side雪夜

「ただいま」

「おかえりなさい」

仕事に追われファンに囮まれぐつたりして帰れば暖かな彼女と美味しそうな料理の匂い。迎えてくれる彼女を囮い込み、こめかみにキスをしてみれば頬を染め照れて俺の懷に額を押しつけてくる。

「香苗、キスしたい」

耳元で囁けばまるで沸騰したかのように赤くなる。それはまるで熟れた果実のよつこ甘い甘い俺の新妻。

「雪夜……」

吐息とともに名前を呼ばれれば妻を先に食べるべきか、それとも俺に気遣つて作られた夕食を食べるべきか悩む。

「早く夕飯を食べてしまおうか。香苗が作ってくれた料理を無駄にはしないよつこ」

やう囁けば俺こくつこいたまま上田遣いに照れて言つ。

「うふ。私を食べるのは後にしてね」

負けたよ。

「またか……」

雪夜はここ三ヶ月、見知らぬ女と夢で新婚生活を送っていた。どこかに〇として勤務しているらしい彼女は一升瓶のワインを愛飲している。そして彼女のとのセックスに溺れている。

夢の中では毎日が蜜月で朝起きれば必ず悲しいことにパンツが悲惨なことになっていた。

雪夜は体をお越しシャワーを浴びに布団を出る。その時だつた背中に痛みが走る。何度か経験したことがある痛みが背中を襲い雪夜は驚く。この痛みは大抵女を抱いた後にしかありえない。そして夕べ抱いた女は夢の中の彼女だけである。雪夜は急いで洗面台に向かうと背中を確認した。

「は？」

そこには無数の爪痕があり驚き以外の何物も浮かばない。ここどころ忙しく一夜の女を抱く機会もなかつた。いや、毎夜夢の中では抱いて居たがそれ以外に女とこういった接触はない。現実にはこの一ヶ月半女を抱いたことはないのにも関わらずこの跡の数々。まさに雪夜にとつて「は？」だつた。

さりに鎖骨下に映るキスマークを一つ見つけ雪夜は頭を抱えた。確かに覚えがあるのだが、あくまでも夢の中だけだつた。

「嘘だろ……」

何があつても時間は過ぎ行くもので、今日の予定を思い出した雪夜はとりあえずシャワーを浴びることにしたのだった。

その夜、雪夜がお気に入りの隠れ家のバーに行くと「咲子さんか……と女性の名前をいとおしげに呟く友人がカウンターに居たので雪夜は隣に座った。

「公平……誰か気になる人でもできた?」

「雪夜さん」

この店の常連客で今一番売れている俳優である友人には気になる人物ができたらしい。圭介にしても公平にしても俺にしても恋に悩むと何故この店で会うのかと雪夜が苦笑していると公平が口火を切る。

「気になる……気になるんでしょうね」

公平が何かを吹っ切った気がして雪夜も静かに口を開いた。

「俺も気になる女がいるよ。ちょっと聞いて欲しいな。夢の中にしか現れない奥さんの話」

ふふっと笑う男に公平は驚く。雪夜はいつも優しげに笑う男ではなかつた。

「夢の話ですか?」

「そり。香苗つて女とここ三ヶ月の間、夢の中で結婚してる。いつも同じ女……いつの間にか気が狂いそうなほど愛してる。背が小さ

くて最近髪を切つたらしい。髪を洗つた後に髪に薔薇の香りのトリートメントをするのが日課で、得意な料理は煮物系……威勢が良くて、どこか会社勤めをしている。こんなにも気になるのに夢でしか会えない。……実際に居るのかもわからない。だけど俺に爪痕だけ残していくんだ。不毛だとは思つんだけど愛しい。」

雪夜も公平と同じ飲み物を頼んでいて、手元にきたマティニーを呷つた。いつもと違う雪夜の様子に、彼もまた自分と同じだと公平は肌で感じる。

「雪夜さん。……俺の話も聞いて下さいよ」

「いいよ」

「去年の夏、圭介とプチ旅行に行つた時にあるお宅に立ち寄つたんです。雪夜さんにもお裾分けしたあの葡萄を作つている農家さんなんですが、そこのお嬢さんが気になるんです。こんな気持ちになるの初めてで……」

「ホンモノかもね……」

イタズラな笑みを浮かべる雪夜に公平は頷いた。

「雪夜さん」

「公平の相手は現実に居るんだし、根気よく頑張つてみたら?ホンモノなら絶対手放せないよ」

「…………ありがとう」「やれこめす」

「俺も香苗を探してみる」とした。せつとホンモノだからね

一人はグラスに残ったマティニーを飲み干すと席を立つた。

「雪夜……」

今日の彼女はビニが違っていた。ビニが落ち込んで沈んでいるようだった。

「おかえりなさい」

「ただいま。香苗……ビニした? 何か悩んでる?」

香苗は悲しそうに首を振る。

「おかしいの……何の接点もないのに……いつの間にかこんなにも好きに」

「これは夢なのかそれとも現実なのか。

「香苗……愛してる。必ず見つけてみせるから

抱き締めていた香苗の姿が消えていく。夢が終わる……

公平と会つてから一週間が過ぎたその日を境に夢を見なくなつた。

突然の蜜月の終焉に雪夜は現実に香苗を探していた。

夢の中の魔用 s-i-d e 霧夜（後書き）

夢で会えなくなりました。

あなたに会いたい s.i.d e 香苗

s.i.d e 香苗

なんでこんなにも恋しいのか。
夢であれだけ濃密な日々を過ごしていたのに夢が絶えてしまえば
ただの日常。香苗が蜜月の夢を見なくなつて一年が経とうとしていた。

「香苗ちゃん。大丈夫？」

隣席の真雪が香苗を案じ、その憔悴ぶりに眉を潜めた。

「大丈夫です。それに明日は週末ですし、従姉の結婚式もあります
から……少し痩せてラッキーと思っておきます」

真雪に以前相談してから一週間で夢は終わつてしまつた。しかし
雪夜の温もりや甘い言葉は一年経つた今でも香苗の体に残つてゐる。
「会つたことのない芸能人に恋をするなんて……もう諦めないと
けませんよね」

その一言に香苗の今の全てが詰まつていた。

「 せつちやん！綺麗！」

「なえちゃん」

「」の従姉の幸せを香苗は願つてきた。そして田の前の花嫁姿の従姉が再び幸せになれるのを香苗は心から喜んでいた。

「本当に良かった。わちちゃんが幸せになれるのをずっとずっと待つていたの」

「なえちゃん…… ありがとう」

「それにまさか相手が芸能人とか！ 詳しく聞かせてくれる？」

従姉、咲子の相手があの手塚公平なのだと親族全員が沸き上がっていた。そこへ「咲子さん…… 今いい？」と艶やか声が聞こえてくる。咲子と香苗は振り返った。

「公平さん」

グレイのモーニングを着た公平が部屋の入り口にいた。芸能人らしいオーラに香苗は目を見張る。 流石芸能人！ でも雪夜の方が素敵だわ。とつい雪夜と比べて少し気落ちした。

「公平さん。」わらわがなえちゃん、従妹の志村香苗ちゃん

「香苗ちゃん。よろしくね

「よ、よろしくお願ひします。わちちゃんを必ず幸せにして下さ

ね

「うふ。必ず幸せにかかるよ」

その自信に満ちた声に香苗は幸せな気持ちになる。

「公平さん、香苗ちゃんはね、東京の商社の営業さんなのーーあつ！
香苗ちゃんとの[写真]、撮つてもらつていい？」「さつちやん、時間だ
よ」

わたわたと騒々しい咲子に香苗は突っ込みを入れて笑つた。

* * *

「雪夜ー！」

「……香苗？ 香苗？」

夢に現れた雪夜に抱き締められた。久しぶりに雪夜の温もりがする。やっぱり雪夜が好き。

「雪夜ー！キスして……こっぽい抱き締めて……こっぽい……して」

「香苗……会いたかった。まだ探し出せなくて」「めん。でも絶対に
搜すから……待つていて」

雪夜に翻弄され身体中を熱くしめぐらめく夜を過いこした。

「雪夜……」

せつかくの日曜日だと喜びのこて一年ぶりの夢に香苗は熱い体を持つて余し、喜びと悲しみを味わう。

「……なんでもまた夢に出てきたの？諦めきれないじゃない」

香苗はそのまま田へ田辺を廻りこした。

真実は近くにあるＳｕｐｅ雪夜

「香苗…」

香苗との雪を見なくなつて一年、今日は友人である公平の結婚式だ。公平は一般人の花嫁側に合わせて親族だけの式に決めたため、今度圭介が音頭を取り祝つてやると息まいていた。圭介とそんな話をした土曜日、香苗の夢を見た。

「爪を立て過ぎたよ香苗……」

下着の違和感に背中に多数の爪痕、そして胸に無数のキスマーク。「……夢の中のセックスでこの跡つて言つても誰も信用しないよな……それでプロモの撮影をどうじよつか」

雪夜はとりあえずシャワーを浴びる」とこした。

「妻の咲子です。で、息子の紅葉^{くれは}」

公平がそう紹介したのは先月結婚した嫁さんとその連れ子だった。圭介が企画し圭介の家で簡単な内輪の祝いの会をしようつと一人を招いた。

「ガチガチだな」

「芸能人に囮まれてどうしようかな感じ」

圭介と雪夜に眺められ咲子はガチガチに固まっていた。息子の方はそんなことお構いなしに圭介の息子と遊んでいる。

「咲子さんをいじめないで下さー」雪夜さん、圭介！

「人聞きの悪い。苛めてるだなんて、なあ？」

「そうですね」

「でも公平君を苛めてるんですね」

雪夜と圭介が目を合わせていると圭介の妻、明衣子がやつてきた。
「結婚式の写真見せていただいてもいいかしら？」

明衣子が目を輝かせて咲子に尋ねると公平が見て見てと言つて鞆から何枚も写真を取り出した。その様子に公平を除く四人が苦笑する。

「公平さん、毎日写メしろって言つんですよ。こんな平凡顔を毎日見て何が楽しいやつ」

「公平さん、毎日写メしろって言つんですよ。こんな平凡顔を毎日見る。公平、ベタボレなんだな

「公平、ベタボレなんだな」

「うぬやこよ圭介ー！」

「公平・父さん母さんにメロメロだつてかなちゃんが言つてたあ」

そこへ紅葉がやつてきて公平に止めをさして一同大笑いをする。
そんな中雪夜はそろそろと一枚の写真を手にした。

「……香苗？」

そこには花嫁姿の咲子と一緒に写る香苗の姿があった。

真実は近くにある side 雪夜（後書き）

みいつけた！

忘れない side 香苗

雪夜のことは忘れよつ。咲子の結婚式の晩に雪夜の夢を見てから再び夢を見ることがなかつた。

香苗は今美容室に居る。先月の咲子の結婚式に感動した香苗の母は娘に見合い話を持つてきた。今日は見合いの日だ。

「成人式の着物がもう一度使えてよかつたわ」

「振り袖つて重いから苦手だよ」

喜ぶ香苗の母に憂鬱な香苗。釣り書も一度として開くことはなかつた。

「相手の方は本当に素敵よ」

母のご満悦な相手に香苗は首をすくめた。薄紫の地に藤の描かれた総絞りの振り袖を着付けられ完成した香苗は母とともに美容室から出た。

ホテルに着く前に香苗は咲子にメールを打つた。「今から桜木ホテルでお見合いです。成人式の時の振り袖を着ました。お見合いが終わったらさつちゃんと会いたい」と。それからホテルのレストランで母としばらく待つと相手がきた。四十前後の印象が特になく普通の人だ。

「お待たせしました」

相手のその一言から見合いは始まった。

「後は若い二人で」とありきたりな言葉で香苗は庭に放り出された。可もなく不可もなく平凡な人らしい彼は優しそうな人だなと失礼な第一印象を少しプラスを加えて香苗は池の周りを男について歩いた。

「あれ? ミュージシャンの雪夜がいる。何かの撮影かな」

結婚したらそれなりに重要な普通の質問をされ適度に返し、そろそろお開きにしてほしいと香苗が思っていると男が香苗越しにボツリと呟いた。

「え? 雪……夜?」

「香苗さんは雪夜好きなの?」

もう香苗の耳に見合い相手の男の声は聞こえていなかつた。振り返った先に立つ人の男の姿しか情報として入つてこない。

「香苗」

「雪夜?」

雪夜は香苗の傍に駆け寄ると香苗を抱き抱いた。

「見つけた……俺の花嫁」

「どう……して？」

「必ず見つけると夢で言つただろ？」

雪夜が右手を香苗の頬に添えれば香苗はその右手に自分の手を添える。完全に一人きりの世界に入つてしまつたことに気付いた香苗の見合い相手の男は入るすべはなさそつと見合いを断るためにその場から離れた。だが二人はそのことに対する気が付かない。

「初めまして藤間雪夜です」

「初めまして志村香苗です」

「初めましてだけど君は俺の妻だ」

「初めましてなのにななたをよく知つているの」

「俺もだ。君が俺の背中に傷痕を残すことを見つていて」

「私もあなたがキスマークを付けるのが好きだと知つていて」

初対面同士なのにパーソナルスペースは恋人同士と物語る。雪夜と香苗の顔が近寄り、そつと重なつた。

忘れないの side 香苗（後書き）

ごたいめん

初めましてからside雪夜

公平が持つてきた写真を見た途端、雪夜の体を雷が走ったようだつた。写真を持つ手が震え質問をしたいのに口が開かない。

「雪夜さん？」

公平は咲子とその従妹のツーショット写真を見て驚愕で固まる雪夜に声をかけた。

「公平……いや、咲子さん、彼女は？」

「それは従妹の香苗ちゃん。まだ独身ですよ。あ、でもさつきのメイルだと結婚するのかなあ？」

咲子の言葉に体から水分が全て抜けたように喉がカラカラになり体が重くなつたような気がして雪夜は咲子を見た。咲子はそんな雪夜の様子に気が付かずに続ける。

「今日、なえちゃんのお母さんがセッティングしたお見合いなんですよ」

「おみ……あこ……」

「はい。そうですが……なえちゃんに何が？」

「場所は？」

「桜木ホテルだそうです」

その会場名を聞くしないなや雪夜は無我夢中に圭介の家から出た。

＊＊＊

薄紫の振り袖が風になびいている。アップにまとめられた髪には振り袖の模様と同じ藤の花が咲いている。その隣には一人の男。雪夜の心は嫉妬で嵐のように荒れ狂っていた。

男が先に雪夜に気が付き、それから香苗がゆっくり振り向く。まるでスローモーションに感じるほどにその瞬間は雪夜の心に刻み込まれた。

「香苗」

「雪夜？」

雪夜は香苗の傍に駆け寄ると香苗を掻き抱いた。

「見つけた……俺の花嫁」

「どう……して？」

「必ず見つけると夢で言つただろう」

雪夜が右手を香苗の頬に添えれば香苗はその右手に自分の手を添える。完全に一人きりの世界に入つてしまつたことに気付いた香苗の見合い相手の男は入るすべはなさそつと見合いを断るためにその場から離れた。だが二人はそのことにすら気が付かない。

夢の中ではすでに夫婦の二人。しかし現実では初対面だ。雪夜は香苗を愛でながら自己紹介をした。

「初めまして藤間雪夜です」

「初めまして志村香苗です」

「初めましてだけど君は俺の妻だ」

「初めましてなのにななたをよく知っているの」

「俺もだ。君が俺の背中に傷痕を残すことを知っている」

「私もあなたがキスマークを付けるのが好きだと知っているわ」

初対面同士なのにパーソナルスペースは恋人同士と物語る。雪夜と香苗の顔が近寄り、そつと重なった。

初めましてからside雪夜（後書き）

ありがとうございました。本編は一応終了となります。

ちなみに桜木ホテルは月光作品のあの人持ち物です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4960t/>

Sweet dream home ~夢の中のあなた~

2011年6月23日13時39分発行